

私の愛する

ダナンバレー

中島 麻祐

ボルネオ島の自然の魅力はさまざまです。ボルネオ島の北部に位置する東南アジアの最高峰キナバル山では、その気候と高度、土壌などにより、ダイナミックに変化する植生の垂直分布がみられたり、ウミガメのごろごろいる、絶海の孤島のゴージャスな水上コテージでダイビングを楽しめたり、何百万匹ものコウモリが夕空に龍のような姿を描いて森に飛んでいく様子を大洞窟で眺めたり…。そんな中で、最も私とその魅力の虜になってしまったのは、熱帯低地のジャングルです。今回はそのジャングルのひとつを紹介させていただきます。

ボルネオ島北東のラハ・ダツという小さな町から車で3時間ぐらい奥地に入ったところに、ダナン・バレーというジャングルがあります。皮肉なことに（ダナン・バレーのある）ボルネオ島サバ州の熱帯雨林のかんりの土地の伐採権をもっている、ヤヤサン・サバという財団が自然保護区

（43,800ha）にしているところです。以前は研究者用の施設の中に一般来訪者用の宿泊施設があったそうですが、ツーリストの増加にともない、1994年にボルネオ・レインフォレストロッジがオープンし、一般観光客もこのゴージャスなジャングルを楽しめるようになりました。ロッジの部屋数は現在24室有り、ここに泊まる意外このジャングルには来ることができないので、おの



ずと訪問人数も制限されているしくみです。ラハ・ダツからロッジへの往復の車代、宿泊料、全食事代、トレッキングのガイド料などすべて含まれているので、けっこうなお値段なのですが、仕方ないかなと思ってしまう。

ボルネオ島でいくつかのジャングルを歩きましたが、広さといい、木の高さといい、野生動物の出現率といい、私にとってはダナン・バレーが一番です。8つのトレールがあり、ロッジのネイチャーガイドの案内でジャングルトレッキングを楽しみます。鳥や動物、植物の名前など、ネイチャーガイドが教えてくれます。朝や昼のトレッキングに加え、夜もトラックの荷台にのって、ナイトサファリにでかけます。動物というのは夜行性のものが多いようです。ジャングルは暗いのでそれほど下ばえもなく、イメージよりもずっと歩きやすいところです。ただ気温28℃湿度は70%と高いので、ジャングルに入るとすぐにぐっしょりと汗をかきます。ここで私の見た野生動物はオランウータン、つがいのテナガザル、オナガザルのむれ、ヒゲイノシシ、スイロク（鹿）、マメジカ、ホエジカ（声をきいただけ）サイチョウはごろごろみだし、ひらひらとし

た白い長い尾が美しいカワリサンコウチョウ、ボルネオヤマアラシ（小型の豚ぐらいの大きさ）、マレージャコウネコ、レオパードキャット、マレーヒヨケザル、オオアカムササビ、カウウソ、樹上で大きなとぐろを巻くニシキヘビ、トビトカゲ、20cmはあるバツタ、10cmぐらいのセミ、巨大ダンゴムシ（ヤスデ）、その角まで含むと13cmはありそうなカブト虫...鳥にいたってはなんだかいっぱい...です。今回、鳥好きのイギリス人のグループと一緒にいたのですが、4日間の彼らの滞在の中で、100種の鳥は確認した、ということでした。ゾウもいるようで、その糞や足跡などはおがむことができました。そしてその奥地には本当に絶滅の危機に瀕しているサイがいるそうです。世界中の熱帯のジャングルというものかどういふものか私にはわかりませんが、ボルネオのジャングルというのはどちらかという地味なものではないかなと思います。そんなにしょっちゅう動物にあえるわけではありません。今回は、かなりラッキーだったと思います。

樹木のほうは、フタバガキの仲間が50mほどの樹高を誇り、カリフラワーのような樹冠をみせています。フタバガキ科の樹木はテングタケ科のきのこ共生して、その偉容を保っているそうです。樹高80mにも達するというメンガリス *Koompassia excelsa*（ジャケツイバラ科）という超高木があります。明るい色のなめらかな樹皮でとても美しい木ですが、これもきつと菌根のおかげなのでしょう。以前、京大の湯本貴和さんが、熱帯の高木はキノコが立ちあげているんだ！と言いきられたことがありましたが、これを聞いたとき、あの美しい

メンガリスと、巨大なキノコの図が私の頭のなかで重なってしまいました。

熱帯低地林＝フタバガキ林＝テングタケ科のキノコという図式でジャングルを歩いていたのですが（実際、テングタケ科のものは多かった）、けっこうベニタケ科のキノコも目につきました。しかし、「ではその植生はどうだったか？」まで頭の回らない私でした。初めてそこの森を歩いたときには、どこまでいってもフタバガキの同じようなジャングルが続いている...としか思えなかったのですが、だんだんジャングルになれてくると、その植生もトレールによってかなり違うものだと感じるようになってきました。で、ベニタケです...。そこはシイ・カシ林だったのか...？ むこうで買った1973年のサバ州の樹木図鑑にはクリガシ属17種、マテバシイ属43種、コナラ属12種、カクミガシ属1種が載っていました...。つまりなんだかいっぱいあって、私なんぞにはよくわからないのです。ただ、ひとつだけ気になった木があって、その葉っぱと小型のクリのようないがいがの殻斗を持ちかえりロッジのネイチャーガイドと図鑑を調べて、それは *Castanopsis borneensis* ボルネオクリガシ？ に違いないということに相成りました。ですからたぶん、フタバガキ科の優占する熱帯低地林にもシイ・カシはあるのだけれども、さてそのベニタケ科のキノコ達はフタバガキ科の樹木と、或いはシイ・カシの樹木と菌根をつくっていたのか、それとも両方の樹木と仲良くやっているのか...ぼーっと歩いていた私には定かではありませんでした。次回の課題です。

キノコについての収穫は、生まれて初めてアミヒカリタケを見たということです。このアミヒカリタケもそうですが、けっこう千葉でも見られるものが多かったです。先ほどのテングタケ科のものや、ベニタケ科のもの、それからたぶんニオウシメジや、キツネタケやダイダイガサ等。つまり本郷先生のおっしゃる「東南アジア要素」のキノコと、やはり本郷先生が図鑑の中で熱帯性のキノコと書かれているものを実際自分の目で見てきたということです。知っている人に遠くの地であったりするのは、なんだか心強くて嬉しいものですが、キノコについてもそんな思いでした。ただ、チャダイゴケがゾウの糞からでていたのには、流石、ジャングル！と感動しました。

さて、97年の7月に行った時の目的は、熱帯の音を録音するというものでした。熱帯の音の世界はゴージャスです。見通しの悪いジャングルでは音は動物たちの重要な伝達手段であり、また50mの樹冠の天井のもとで音はよく伝わり、素敵なエコーがかかっています。音符に書き写せるほどに見事なさえずりをする鳥、人を小馬鹿にしたように鳴くオナガサイチヨウ、まるで怪鳥のようなコウテイゼミの鳴き声、とてもサルとは思えない透明感のあるテナガザルの鳴き交わり、といくら書いてもこれは耳にしていただかないとどうしようもないものなのですが…。目にすることはできなくて聞こえていただけのものにでも、名前を覚えてもらおうとその存在を意識し、想像力でそのものをより近くに感じ、その存在を愛しいと思うようになった私でした。こんなに美しい自然の音の世界は絶対になくなっ

てほしくないと思います。

私が熱帯に惹かれる最大の理由は、私が夏好きだからだと思います。なぜ夏が好きかといえば、子どものころに長い夏休みがあったからです。そして熱帯は私の好きな夏が終わらないのです。永遠に夏なのです。守られた熱帯雨林の木々をじっと見ていて胸がしめつけられるようにせつなくなるのはこの永遠性でしょう。守られたこの原生の森の数千年前と現在と（願わくば）数千年後も同じ森であるならば、現在の私とその原生の森に見ているものは過去でも現在でも未来でもあるので、それは時間を超えた永遠にかわらないものなのかもしれないと思えるからです。或いはそうあってほしいと願います。

また先日飛行機事故で亡くなられた井上民二さんが言っておられたことですが、東南アジアの熱帯雨林は他の地域とくらべて一番古く、それゆえに、様々に発達した共生関係がみられるそうです。それはつまり、あそこでみられることは植物や動物がめぐまれた環境で生きていったときの一番発達した姿というわけで、いわば地球生物体の自然な最新の姿でもあるのだなとも思います。

